

田中優子

● 穴っぱ入り (洒落小町)

穴っぱ入りは「穴這入 (あなばいり)」が変化した語で、穴に入ること、穴に入り込むことをいう。転じて情婦の家や遊郭などに入り込むことを指した。穴這入には「墓穴に入る」という意もある。墓穴は死後に行く、暗くて凝視を避けようとする場所なので、暗闇を暴くという意図もあろう。いつの時代も同じだが、江戸時代中期にも、表面的には気がつかない人の世相を「穴」と言い、それを暴き、あえて表現することを愉快に思う読者たちがいた。これを担ったのが、庶民が好んで読んだ談義本、洒落本、滑稽本、黄表紙等である。作者たちは、この表現方法を「うがち (穿ち)」と呼び、これが江戸戯作の方法となった。遊郭から遊女が消えて遊男ばかりになり、高齢者が遊び呆けて若者が引きこもる社会を描くなど、社会の新現象を誇張して描くことで、何かを気づかせるのである。

● 盲人 (松田加賀)

江戸時代は座頭・瞽女・盲僧が、独自の組織を作っていた。特に座頭は剃髪した僧の姿で、平家琵琶、鍼灸、もみ療治、箏曲、三味線などの職業に従事した。これらの盲目法師は幕府の公認で、公家の久我家を本所として当道座という組織をつくり、官位 (惣録校、検校、勾当、座頭、初心) をもち、絶大な権威と経済力を持つに至った。塙保己一のような学者も輩出し金融業も営んだので、社会では一目置かれる存在だった。それだけに、その権威主義をからかいたくもなるのであろう。しかしその昔から、視覚を失った場合、それを補うように潜在能力を発揮することがある。歴史を振り返るとシャーマンや占い師、音楽家、琵琶法師のような口頭伝承や語り物の担い手等、盲人が特別な才能を発揮したのであるから、ある種の「畏れ」もあったのである。

● 建仁寺垣（茶の湯）

どうやら隠居の別宅は、洒落た建仁寺垣に囲われているようだ。しかし客はその垣根の向こうに、菓子を投げ捨てるしかない、という話である。はた迷惑な趣味の癖は落語の定番だ。建仁寺は、栄西が開いた臨済宗建仁寺派の本山である。鎌倉時代中期に南宋から渡来した禅僧、蘭溪道隆が住持の頃に修禅道場となった。建仁寺垣とは建仁寺中門にある竹垣の名称だ。竹を縦に四つ割にし、竹の表面を外にして平たく並べ、竹の押縁を横に取り付け縄で結ぶ組み方が、それ以前と異なるのでそう呼ばれるようになった。中国の様式なのかも知れない。垣は古事記に記されているほど歴史が古いが、鎌倉時代に多様な材料や型式が出現したようだ。神社の結界と類似しているように見えるが、その目的は聖なる空間を作ることではなく、外敵の侵入を防御しつつ住人の趣味を表現することであった。

● 魚の名前（てれすこ）

テレスコとステレンキョウ（演者によって別名もある）は、ポルトガル語やロシア語など諸説ある。侵略を繰り返す愚かな人間と違って、魚には帰属する国もなければ国境もない。従って魚の名は、魚が自ら名乗っている訳ではなく、捕獲した者が便宜上つけたものだ。総称である「さかな」は、中世前までは「うお」といった。そもそも原始的な捕獲方法しか知らない時代は、捕獲できる種類も少ないので個別に名前をつけて他者と共有する必要がなかった。それゆえに同じ魚でも、捕獲した国によって名前が異なったのである。捕獲場所が広域（遠洋）になり、捕獲技術も合理的で多岐になった現代の日本では、東京魚市場（少し前までは築地）で呼称する名前を標準としている。聞くとところによると、温暖化の影響が見知らぬ魚が獲れ始め、最近では百科事典片手に調べることもあるという。

● 旅（三十石）

別名『三十石宝の入船』や『三十石夢の通路』ともいう。三十石とは淀川を通行した三十石船の略だ。この噺は上方落語の『二人旅』および『東の旅』の一部分で、二人の江戸っ子が京都見物を済ませ、伏見から三十石船に乗って大坂へ向かう旅の出来事である。戦乱の世まで旅は、芸能民や商人・職人など、旅が生活や仕事と一体だった者に限られていた。江戸時代に入ると内戦が終結し、旅をする環境が一変する。都市の発達と共に生産力と庶民の消費生活が向上し、人口の増加と共に旅人口も飛躍的に増えた。更に参勤交代の影響で街道や宿の整備、駕籠や船の技術が進み、旅は「苦しいもの」から「楽しいもの」へと変化していった。その頃の旅は現代と比べると途方もなく大変だが、しかし戦さが無くなった開放感は未知のものへの好奇心を育み、更なる経済効果となったのである。

田中優子（法政大学名誉教授、江戸東京研究センター特任教授）

法政大学社会学部教授、学部長、法政大学総長を経て現職。

専門は江戸時代の文学、美術、生活文化、アジア比較文化。

現代社会についての連載エッセイなどもある。

『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞

『江戸百夢』で芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞

その他著書多数。2005年紫綬褒章。